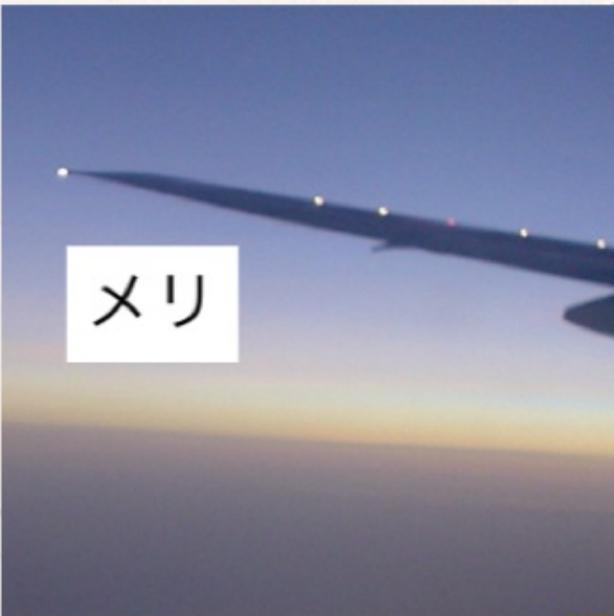


運(命)を願う



メリ



「…あ」

引いたクジには1等の文字。いつものように。

「スッゴイ!!リラ何回目え??」

「前もペアの旅行券とか当ててたよねえ。良いなあ～。マコそうゆうのは当たった事ないよう。う～」

高い微妙な作り声でしゃべるな。わざとらしく唇出さな。自分を名前で呼ぶな。そうするのが悪いとは言わないけどアンタのは完成度が低くて気持ち悪いだけ。

「へえリラちゃんってそんな運良いんだ!!マジすげえ」

「そうなの～。スゴイのいつも当たっちゃって!!リラくじ引きだけじゃなくって学校のマークシートとか選択問題とかも勉強してなくてもいつも当たっちゃてえ。マジでスゴイけどちょっとズルイよねえ」

ユミが自分の手柄の様に言った。イヤそれは運だけじゃなくアンタとは元が違うから。てか本音は最後の部分だよな。

色々思うことはあるけどそんなことはチラとも表情に出さず。うーんこの場面での正解は。

「まぐれだよこんなのお。自分でもビックリしちゃった!!あっても今朝のテレビの占いで一位だったからかもっラッキー!」

私が嬉しそうに笑いかけた相手はユミの狙いのショウ君。さっきの頭悪い言い草への可愛らしい仕返し。

案の定あっさりひっかかって私が賞品を受けとって歩きだせば隣に並んできたショウ君が、イヤでもすげえって朝のって星座のヤツだよな、リラちゃん何座なの??と話し掛けてきた。相手をしながらチラリと確認すると悔しそうな顔したユミもこっちに歩み寄って来る所だった。

「でもこないだなんてホントにスゴかったんだよ!!ペアのディズニーのホテルチケット当てちゃった時なんてこのコ目当ての男のコとか元彼とかまでそのペアの座を奪い合っちゃってえ」

ユミが無理矢理ショウ君に話しかける。私に男の影をチラつかせるというオマケ付きで。うん、このコにしちゃ頭良い方法だけどマナーが悪くないかな。

「えっそれでリラちゃんどうしたの??」

何故か焦った様に聞いてくる。予想以上の食いつき。

そこで困ったように首を振って言ってやった。

「行けないよそんなのー。付き合ってる人いなかったしそんないきなり泊まりなんて…」

そこでちょっと頬を染めて、でもちゃんと付き合ってる人いれば行きたかったかも。とポツリと呟いた。我ながら完璧。

だよな!!あー良かったっというショウ君になんで良かったの??なんでって…なんていう一連の流れをしてる間、ユミが凄い目で睨みつけてた。

うーんそろそろ引いてあげないと後が面倒くさそ。そう思ってもう一人の男の子に声をかける事にした。

私達の中学は定期的にグループ発表をするのだが、そのグループは大体男3・女3の6人班。自由なメンバーでいいからみんな仲良い同士で作る。

ユミは案の定サッカー部のイケメンFWとして有名な(イケメンって言葉廃れないなあ)ショウ君とが良いと言って、ショウ君と仲の良い後2人の男の子、同じサッカー部FWコウタ君とDFのトモキ君、女はユミ・私・マコというグループを作る事になった。

グループ発表とはいえ所詮中学だから、一回担当箇所を決めればみんな各自自宅でやれば終わるのだが、ショウ君を狙っているユミとしてはこのチャンスに距離を縮めておきたい。グループの仲を深める為に遊ぶ事を提案してみんなそれに勿論乗った。

それでこうやって遊びに来た遊園地での帰りにキャンペーンか何かでくじ引きを引いて私が1等を当てたりしたわけだった。

ユミの不機嫌をかわすためにショウ君から離れた。コウタ君はショウ君と同じFWで人気がなくもないが少し身長が低い。彼が同じくミニサイズなマコを気に入ったらしい事は今日遊んでる中で解っていたのもう一人のトモキ君に近づいた。

「さっきの凄かったね。おめでとう」落ち着いた声でトモキ君が言った。

彼はサッカー部なのに(というのは偏見か)落ち着いていて、クラスの副委員長だった。人気は他2人と比べると数こそ少ないが一人ひとりの真剣さといった質は確実に他2人より上。図書委員の橋田さんとか。DFの渋さが解るトモキ君のファンは良い目をしている。確かに多分3人の中で一番確実に良い男になると思う。

「ありがとう。ラッキーだったよー」

「本当に??なんかあんまり喜んでるように見えなかつけど…」

ギクリとした。

「嘘。勿論嬉しいよ??」

「そうだよ、じゃあ気のせいかな??変な事言ってゴメン」

時々いるんだ、こうゆう奴が。

妙に感が鋭いのか、はたまた子供の直感か対大人にはバレた事のない演技をごく稀に解ってしまう子がいる。大抵周りが馬鹿ばかりで扱いやすくて全然楽、と調子に乗った頃に言われる、「本当に笑ってるの??」とか「作ってない??」という言葉には本当に冷水をいきなり頭にぶっかけられたような気持ちになる。やっぱり私のコレは違うんだって気付かされて。仮面を剥がされるかもしれない恐怖に。

話をそらすように

「でも本当に運はいいのかもー。結構当たることは多いんだあ」

たとえば、

「へえ、そんなに当たるって事はやっぱりなんかコツとかあるの??」

ビックリした。そんな風に言われたのも初めてだったし、実は確かにあるのだ、コツが。

何回当たっても本当に運が良いんだねと言われるだけでコツがある事に気付いた人なんていなかった。運のおかげにするって事は原因について考えることをしないということ。つまり自分も当たるように出来るかもということを考えないってことだ。散々運を羨ましがったり妬んだりはずるが。

「…トモキ君って面白いね」

凄く久々に何も考えない内に言葉が唇から出ていた。

「そう??そんなことあんまり言われた事ないんだけどな…で、あるの??」

期待が胸の中で膨らんでくるのを感じた。もしかしてコイツは。

「有るよ、コツ」

「本当に!??」

マジで有るんだ!!?運よりスゴイよソレ!!と真剣に驚いている顔を見つめていた。

「で…ど、どんな??」

期待に満ちた顔で聞いてくるので。

「知りたい??」

「勿論!」

「…ナイシヨ。」

「ハアッ!!?」

ウソオ酷いって期待させといて～とガックリする顔を面白がりながら見ていた。

「落ち着いてると思ってたけどトモキ君って表情よく変わるね」

「間垣さん面白がってるでしょ…普段はそんな事言われたいよ。歳の割に落ち着いてるって言われるし」

間垣さんてこんなキャラだったっけと拗ねたように言うのが可愛くて笑ってしまった。殆ど作りは入っていなかった、多分。まあいつもよりは。

月曜日、学校。

ユミは怒っていた。ユミがショウ君好きなのを知りながら色目使いやがって、ってことだ。ちょっとショウ君で遊んだだけなのに。元々私と張り合いたがる困ったコだった。

でも要領よくマコは既に味方につけていたし、クラスの女の子も私側。なので後はユミの怒りが醒めればオーケー。「むしろユミがなんで怒るかわかんないよねてかあの子自分可愛いとか勘違いしてね??」って風潮になっている。こんなときは普段の立ち回りがモノを言う。

後は火に油を注がないようにやたらに話し掛けようとしてくるショウ君を避けてればよかった。

そんな訳で。教室にいたら見つかるので屋上に向かった。

最近のあらゆる手回しはめんどくさかったけど、気分は良かった。久しぶりにちゃんと会話出来るような面白そうな人を見つけたから。

だから向かった屋上にトモキ君が居るのを見つけた時には口角が自然に上がるのを感じた。

あー、間垣さんと気付いたトモキ君に近づいておはよーという。それだけでなんだか楽しかった。

「良いけどさ、まだ間垣さんなんだ」

クラスの男の子は殆どみんなリラとかちゃん付け。

「だって間垣さん意地悪いしさ」

「フフ、根に持ってるんだ??」

「期待したんだよ」

アハハハッと軽く笑う私をみてトモキ君が不思議そうに言う。

「間垣さんこそイメージ違ったな」

「そう??」

「なんかスゴイモテるし可愛いーって有名だから自分と同じくらいモテる奴とか以外興味ないと思ってた。てかちょっとビビってた。」

「ふーん。今は??」

「今は…ていうか遊園地行ったときはなんか笑い方が、ちょっとゴメンだけど作ってるぽくて、あーやっぱイメージ通りって」

「…うん、」

「ゴメン気にした!?でもその後2人で話した時とか今日とかは割と普通に笑うんだなって思ってさ、ああ勝手にビビってたけど普通のコだったんだなって…イヤ普通って褒め言葉じゃないよね、ゴメン」

「じゃあさ、」

「うん??」

「今はビビってないなら呼び方はリラで」

「…わかった。俺も呼び捨てで良いから」

あーなんかスツキリ。と伸びをするトモキを見つめながらなんだか更に期待が高まってしまふの

を感じた。普通だって。私にとっては一番言ってほしかった言葉。褒め言葉だよ、十分すぎるほど。

「じゃあさ、お近づきの印に。教えてくれる??コツ」

トモキは悪戯っぽく笑って言った。

「うーんまだダメ」

「まだって何!??」

「だって人に教えちゃうと自分の当たる確率下がるし。くじ引き限定のコツだから」

「でもリラ当たった物に興味なさそーなのに。そんなに当たりたいの??」

「スゴイね、そこまで解っちゃうか。」

ギシッとフェンスに指を絡めながらもたれ掛かり、どこまで話すか考えた。

「実際にラッキーな事が沢山起これば自分の運が本当に良くなるって説知ってる??」

「聞いたことないけど・・・ホントなのそれ??」

かなり怪しくない??とトモキが言うので、確かにと頷いた。

「何でそんな説知ったのかも覚えてないし。かなり眉唾だけど。」

でもね、と続けた。

「運でしか叶えようがない願い事があるから。藁にも縋りたいの。」

リアリストの主義に反するんだけどー、てっかクジ当てんのに技術使ってる時点でインチキしてるんだけどさ、となんだか本気で話したのが怖くなって最後冗談めかして言った。この話を他人にしたのは初めてだ。

「その願い事って何??」

「その願い事って何??」

真剣な顔で聞かれた。

「え、と」

どうしよう。

「…それもまだナイショ。さっ授業始まるよ一行こう、副委員長」

「待って、リラ」

「えートモキ副委員長のくせに授業サボる気いー??」

そう振り返って言った私の表情から何かを読み取ったのか。

「リラが話したいって思ったらいつでも呼んでよ。俺は聞きたい」

敵FWと向き合った時のような真剣な表情のままでそう言って、先に階段を降りて行った。

どうしよう、嬉しい。真剣に聞いてくれた。

…やっぱりトモキがそうなのかな。

そうなら、いいな。

その日から、教室などでも普通に話すようになった。人の目もあるから他の人と話す時みたいなキャラで喋るけど。トモキも気にしないみたいだし、それでも十分楽しかった。

その楽しいのとは裏腹に、本当にユミは困ったコだ。意地を張って私に怒ってる限りはクラスで辛く当たられるのに結構頑張る。それは出来る限り無視しててもまだ諦めないらしいショウ君のせいもあるかもしれない。最近トモキの友達だと思って辛くも当たれないし。

すぐに折れると思っていたのに意外と粘るから一度完璧に対ユミで纏めた女のコたちに同情が生まれ始めてしまった。私が原因のショウ君の友達、トモキと仲良くしているのが気に食わないのもあるらしい。

防衛本能ゆえか、女のコはとにかくモテる同性に厳しいものだ。特にそのコが複数の男に良い顔しているように見える時は。男好きのレッテルを張られ、敵視される。

このままじゃマズいなあ。と思いながら手を打つのがなんだか気が進まなかった。普通にトモキと偽らずに話せるようになって、なんだかそうゆう裏で手を回したりが嫌になった。自分の心が汚いのが嫌になった。

そんなある日。

「リラちゃんてトモキのことが好きなの??」

シュン君に言われた。

「まだ好き、とかじゃ…」

「ウソつかなくていいよ、そうなんだろう??」

本当にそうなのかは解らない。好き、って気持ちが良い解らないのだ。今まで本当に人を好きになったことなんて、なかったし。好きになんてならなくても付き合えたから。

けど、コイツが諦めるなら。

「…うん」

「俺より??」

「うん」

これは素直に答えられた。

「…そうか。解った」

と言って。

これでシュンとは片付いた、と思っていた私は、トモキのピュアさに染まって平和ボケしていたのか。

ショウはサッカー部の花形FW。学校のスター。そのプライドは山より高く、自分がフラれることなんて許せなかった。認められなかった。らしい。

そしてフラれて何をしたかというと。

パンッと良い音がした。

「…私に黙ってずっとショウと付き合ってたんだって??」

この声はユミだ。

「それでトモキ君も騙して2股かけてたって」

そういう事になったらしい。

ショウにそう言われて激上したユミが公衆の面前でピンタ付きで弾圧してくれたお陰で、すっかり私が悪役にされてしまった。

そうなるとうどうなるか。

善意の第三者というやつにひどく辛く当たられる。リラ酷い、ユミがかわいそう。やっぱり男癖が悪いんだよ噂どおり、ヒソヒソヒソヒソ、影でしゃべって、チラチラチラ視線を向けてくる。

そんな直接的に仕掛けてくる訳でもない名も無い人達なんてなんの害もないが、やはり毎日行く学校での事、居心地悪いと気が滅入る。

トモキが真相を知ってるのが救い。でもトモキが例の名も無い人達に否定してくれたってトモキ君騙されてて可哀相、って事になる。

「まあそんなもんだよ」

また屋上で私はトモキに話していた。

「人の噂なんてすぐ収まるし。私は全然平気だから」

陰口なんてちょっと不愉快なBGMだと思って聞き流せば良い。しかもこんなの初めてではない。時間さえかければまた地道な演技力で巻き返せることが解っている。

「でもショウが原因だろ！アイツ…」

「だからいーって」

お返し考える気力も湧かなかった。フラれたからってやる事があまりにガキっぽくて馬鹿馬鹿しい。

「だからトモキももう弁解してくれなくていいよ??」

逆効果だし。と思いながら言うとトモキが悔しそうに俯いた。

「リラ」

「なあに??」

「リラの願い事って何」

うーん。言っても良いかなあ。今言うとなんか弱気になって変な事言ってるみたいに聞こえるかも。

まあいいか。何だかんだで私も弱ってて常になく強く願ってることだし。

「かなり馬鹿げた、現実味のない話に聞こえると思うけど」

「良いよ」

「運命の相手に、逢いたいのに」

「……。」

「意外だった??」

「リラ以外の女の子が言うなら、そうでもないけど……」

「夢見る女の子ならねえ」

「リラ現実主義者だから」

「でも現実的な話なんだよ」

怪訝な顔をするトモキに言う。

「別に運命の相手って恋人とか、結婚して夫になる人じゃなくてもいいんだあ。愛人とか友達とか同僚とか、ご近所さんとか相棒とか相方とか、上司と部下とかもアリか。もしかしたら自分の子供とか孫かも。歳がうんと離れてたっていいの。別に恋愛の相手じゃないなら問題ないでしょ」

反応をうかがいながら言う。

「ただ自分がその人の為に生まれてきたような、その人が自分の為に生まれて来てくれたように思

える相手なら。ああお互いの心のもう半分を持って生まれて来たんだなって思える相手なら。運命の人を待つのが馬鹿な夢物語なのはその人が恋愛の相手を待ってるからだよ、それだと一気に可能性が限られる」

フィと視線を外して続ける。

「恋愛対象なら普通異性だけだし、待てるのは精々10歳からとしても肉体的に50歳くらいまでで40年、相手も自分と同じくらいの年齢だけでしょう??私の場合なら対象はいうならば全人類だし、SEXするしないは関係ないんだから私が死ぬまで待ち続けられる。運命の相手が世界にたった一人とは限らないし、それなら会える可能性はけして低くはない、後はすぐ会えるか死ぬ寸前になるかは運次第だよ、そもそもの可能性がゼロでさえなければ」

…ゼロでさえなければ、ともう一度噛み締めるように呟いた。

「それが私の願い事。…引いた??」

「…いや。」

「リラの運命の相手が、俺ならいいな。」

その言葉だけで、なんかもう、十分。

そう思っていたのに。

その後、私と話つけた方が良く、言いたいこと全部言ってやりなよと周りに唆されたらしい今回の悲劇のヒロイン・ユミに呼び出された。

これさえ無ければ許したのに。一応騙された被害者だと思ってあげてたのに。

取り巻きの名も無いみなさんに囲まれてそれを直接告げてきたユミの被害者ぶっていながら勝ち誇ったような目を見て、そんな殊勝な気持ちは吹き飛んだ。

このコ結局、私に勝って嬉しいだけか。

あらそう。それなら遠慮はいらないよね??

念のために、一つだけ確認。

「ユミ、まだショウの事好き??」

その瞬間、ユミの目が揺れた。うん、決定。

話し合いは2日後だったから時間的にはかなりシビアだったがなんとか準備は間に合った。

やった事はとっても簡単。その日集まった女の子達に当時のショウとのメールを見せて、その時うっかりを装って前日にかかって来ていたショウからの留守電の記録を流してやる。その前に私がかけた涙ながらの謝罪の電話のお陰でイイ気になったショウは上手い具合に自分のやった事をペロッとバラしてくれた。ついでにユミの話も振っていたので「ユミなんてあんなケバい馬鹿女と付き合う気なんてない」というオマケ付き。最後に良いオウンゴールを決めてくれた。

こんな簡単に証拠を提供してくれるヤツだから憎む気にもならなくて復讐する気もなかったのに。

あとは良いコぶってユミはショウ君を好きで騙されても信じこんでるのにショウ君がこんなじゃ可哀相だから言えなかった。と涙ぐみながら言うだけだ。

形勢逆転。ヒロインの座は再び移り、元ヒロインは哀れ一路騙されていた馬鹿女。一方逆境に堪えた健気な少女はまた聴衆の拍手に迎えられながらスポットライトの中へ。

と。正直イイ気味としか思えなかったのに。

「友達によくそんな真似出来るな」

いつもの屋上でトモキに睨みつけられそう言われた。

「…なんで??向こうにやられたから仕返ししただけだよ。元凶はショウだし。」

心底言われた事を不思議に思ってそう返した。

「だからってあんな公衆の面前で辱めることないんじゃないか」

「私も見世物のようにビンタされたけど」

「その時ユミちゃんは本当に騙されてたんだからしょうがないだろう!!」

「無知が免罪符になるんだ」

しかもあの時真相を知らなかったかどうかは今考えると怪しい。

「そんなこと言ってるんじゃない!!なんで友達泣かせて罪悪感を持たないでいられるんだ!!」

イヤそんな事言ってるよ。友達、友達ってなんだか幼稚園の先生と話してる気分になってきた。

「じゃあやられっぱなしでいれば良かったんだ。…トモキは何も出来なくて悔しいって言ってくれたのにアレは嘘だったの??」

理詰めしても良かったけど、なんだか本当に悲しくなってきたからそうはせずに思ったままの気持ちで話したのに。

「自分が何されたにしたって人を傷つけて喜ぶなんて人として最低だろっ!!?しかも周りの人をみんな騙す様な計画立てて実行するなんて」

「トモキはいついかなる場合でも人を傷つけちゃいけないって思うの??」

「当然だろ」

私はそうは思わない。そうじゃなきゃ私みたいな人間は傷つけられるだけ傷つけられて死んでしまうだろう。

トモキは罪がないと言った無知により振り下ろされる刃で。

「…トモキは俺が運命の相手なら良いって言ってくれたのに」

まだ希望を持っていたから、そういった。

「…あんな願い事なんて、どうせ嘘だったんだろ」

……は??

「あれはいつも男を落とすときの常套句なんだろ。俺も騙されるトコだった」

何?? う、そ。

「シヨウはサッカー一部辞めなきゃならなくなったし、ユミちゃんは学校来れなくなってんだぞ!! そうなると平気で出来るような奴が運命の相手に逢いたいなんて夢みたいなこと計算以外で言うわけが、」

まだ何か言っていたが、聞こえなかった。学校来れなくて、そうしなただけで私もそうなったかもしれないとか。あれだけ言っても結局夢物語としか理解しなかったのかとか。結局は信じてくれなかったのかとか。そんな事がぐるぐる頭の中を回ってた。

人を傷つけるつもりはなくても、寧ろ狙ってやるより深く、人を傷つけることは出来るんだよ。

それともこれも、そんなつもりじゃなかったから罪にはならないって言うのかな。

そんなこともうどうでもいいか。とにかく、この場合の、正解は。

「あーバレちゃったかあ。トモキは恋愛慣れしてなさそうだから騙しやすそうだったのに」

「やっぱりか……。最初からそのつもりで」

「そ。話してみたら素直で面白いから遊んでみようかなって」

ショウ君もいたし良い暇潰しになったーとケラケラ笑ってみせる。

「フザけるな!!人をなんだと思って、」

「えーちょっと遊んだだけじゃん、怒らないで?? あ、みんなにバラすとか無駄だよ、今私、新・悲劇のヒロインだから」

大衆は私の味方、とウィンクしてみせた。

「バレちゃったならもう遊びはお終い。さあ出てって」

笑いながら手をヒラヒラ振りながら言うと、しばらくは悔しそうに睨みながらも、そのうち諦めるように首を振ってから屋上のドアを開けて出ていった。

バタン。

と重そうな音をたてながらも、呆気なくドアが閉まった。

その途端に顔に貼付けていた笑いがスウッと消えていった。もう、作る必要もない。

嘘の笑顔を消してみると、それこそ嘘のようにすぐにポロポロと大粒の涙が開いたままの目から頬を伝って落ちていった。

しばらく、久しぶりに自分で流した涙がコンクリートを濡らしていくのを眺めていた。が、ふと立ち上がり手摺りの方へ歩いた。

少し下を眺めた。

ここから落ちれば、次の人生では、もう少し簡単に運命の相手と出会えるのかもしれない。

この人生では、確率が、0%なのかもしれない。頑張っても、待ち続けても、無駄、なのかもしれない。

それは実はもう何回も考えたことで、その度に結論も同じ。

そんなのは、実際に死ぬまで待ってみないと、わからない。だから、この人生で、死ぬまでは待ち続けてみる。

もう一度自分に言い聞かせる。解っていながら期待が外れてしまうと考えずにいられない。

自分が落ちる代わりに、ポケットから紙を出した。
この間の1等の景品、お食事券5万円分。

いつもなら当たった景品はすぐに売るのだが、トモキをご飯に誘う道具にする為に珍しく取ってあった。今日は全部片付く予定だったし、祝杯を挙げようと誘うつもりで持ってきていたのだ。

人差し指と中指の間に5万円と等価値の紙を無造作に挟んで、手摺りの向こう側に腕を伸ばした。

「オメデトウどっかの誰かさん。本当に運が良いのはコレを拾う貴方だね」

そう呟いて。

手を放すとヒラヒラ落ちていく紙に、落ちていく自分の姿が重なって見えたのだった。

高校に上がってお互いに一発で運命の相手だと解ってしまう最低な男と出会うまで、実はそう遠くはなかったある日のお話。